

みなさんの周りの子どもたちは、
100年後の日本が
どうなつていてほしいか
語れますか？

はじめに

みなさんの周りにいる子どもたちは、この質問にどう答えるでしょう。

東日本大震災の後、交流した福島の中高生たちは、この質問に明確に答えてくれました。

ある高校2年生の女の子は「私、学校の勉強はできないんですが…」と前置きしながら、「地元の綺麗な桜から、エッセンシャルオイルを作りたいんです。地元のものを生かした街づくりをしたいんです。でもオイルを抽出することって難しくて…」と語ってくれました。はつきりとした「未来」が澄んだ言葉とともに、僕の心にしっかりと届きました。こんな話をする彼女の周りは、みんな前を向き、そこに陽だまりのような心地よい空間が生まれます。

翻つて、当時僕が教えていた東京の進学校の生徒たちは、よくテストの結果を気にしていました。できないことに伏し目がちになり、気持ちが行き場を失っているよう

に見える、そんな空気感に心当たりはないでしょうか？

僕の生徒だけでなく、日本の多くの子どもたちは日々、教科学習に追われ、テストの点数や入試が学習の目的となってしまい、学びが「社会」や「未来」につながっているという実感が持てていません。だとしたら、これは間違いく学校教育の責任です。

事実、日本財團が行った「18歳意識調査」（2019）で、「自分で国や社会を変えられると思う」と答えた日本の17・19歳はわずか18・3%で、調査した9カ国中最下位でした。この結果は日本中の教師に衝撃を与え、これから世界をつくっていく当事者として子どもたちが育っていく教育の必要性が叫ばれています。

学びを社会につなげたプロジェクト型の探究授業などは、子どもたちの学びを社会につなげるひとつ的方法です。2022年には「探究学習」は高校でさまざまな教科に必修として導入されます。

しかし、子どもたちが「自分で国や社会を変えられる」という主体的な考えを持つようになるには、学校での学習そのものが、先生に「教えられるもの」から「自ら学ぶもの」という大きなマインドの変化が土台になります。

自律的に学び、学校をよりよい場所へ「自分たちで変えていく」「自分たちでつくつていく」という意識が生まれなければ、社会を創っていく当事者に育っていきません。

僕は東日本大震災以降、「教えない授業」と呼ばれる生徒が自律的に学ぶ授業実践を始めました。「教えない授業」はその名のとおり、先生が一方的に教えるのではなく、子どもたちの好きを追求し、子どもたちが学びを自律的に行う授業です。

子どもたちの興味関心からスタートし、勉強が社会で役立つことを実感させ、学ぶ意欲を引き出していくます。

当時は、まず自分の英語の授業を中心に「教えない授業」を始めました。英語の実践については以下の書籍等を参照していただければ幸いです。

『はじめてのアクティブラーニング！ 英語授業』（学陽書房）

『なぜ「教えない授業」が学力を伸ばすのか』（日経BP）

『教えない授業』の始め方』（アルク）ほか

その後、2019年に25年勤めた東京の公立を辞め、私立の中高に移り、「教えない授業」のコンセプトを元にした、自ら主体的に学んでいく「自律型学習者」の育成を目指して学校を挙げての教育改革に取り組んでいます。

その様子を、NHKドキュメンタリー番組「目撃！にっぽん」で紹介していただきました。半年にわたり、先生や生徒の名前を覚え、日常に入り込みながら取材していただいだディレクターの日沖七瀬さんの言葉を紹介します。

【この番組を企画したきっかけは】

働き方も人生の価値観もどんどん変化し、「いい大学に入る」「安定した企業に入る」などかつて理想とされていた「ゴールは、必ずしも幸せを約束するものではなくなりました。昨日よしとされていた社会が、明日も同じであるかは誰にもわかりません。そんな時代に、私たち大人が子どもたちに教えてあげられることは何だろう。その答えを探し始めたときに、番組の主人公である山本先生の「教えない授業」と出会いました。子どもたち自身が、自分の“好き”をとことん突き詰める中で、学びの楽しさを発見していくというコンセプト。(中略) 一体どんな秘密があるんだろう? と興味

がわき、取材を始めました。

本書を手に取った方の中にも同じような疑問が浮かんだ方もいらっしゃると思います。そこで本書では「教えない授業」のコンセプトを学校全体で取り入れ、自律型学習者を育していくための具体的な手法を紹介していきます。

とりわけこの中で紹介する「学びのミライ地図」は、子どもたちが、「なりたい自分」や「実現したい社会」を明確なゴールとして意識し、いまやりたい学びを「デザインしていくために有効な手法です。

明確なゴールが生まれると、それを達成するために必要な学びを意識するようになり、自律的に学び始めます。ここが「教えない授業」の意味するところで、決して「教える」ことを放棄し、放任するわけではありません。親や教師がいなくとも学び続ける「自律型学習者」を育てることが本書の目的となります。

すべての子どもたちが「学びのミライ地図」の描き方を手に入れ、社会を創つていく当事者として育つていくことを願っています。

山本 崇雄

第1章 「学びのミライ地図」を描き出した子どもたち

3

8

通用しなかつたアクティブラーニング
「学びのミライ地図」が描けない子どもたち
「学びのミライ地図」が描けないわけ
何のために学びますか？
17 19 21 23 25 26 28 29 31

英語の可能性を知る体験をする
どんなことを話したい？で教科書を読む
「彼氏いる？」を聞いてみたい！
33 34 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67

社内公用語英語化の楽天の社員につなぐ

31

教科書は教えない

LEGO® を使って英語を学ぶ

子どもたちの「やりたい」の芽吹きを待つ勇気
「やりたい」がほかも伸びすぐ風呂敷理論
「ゲーム好き」から自律した学びにつなげるには
「やりたいこと」をどう授業に取り入れるか

教科を学ぶ目的を授業で実感する

教科の学び方を授業で実感する

「やりたい」とは子どもたちの中に埋もれている
「やりたい」とは指數関数的に増えていく
学びのミライ地図を中心に、学期の学びをデザインする
個別最適化し、自律を育てる単元テスト
「学びのミライ地図」を描く自律型学習者

67

64

55

53

51

50

47

44

42

40

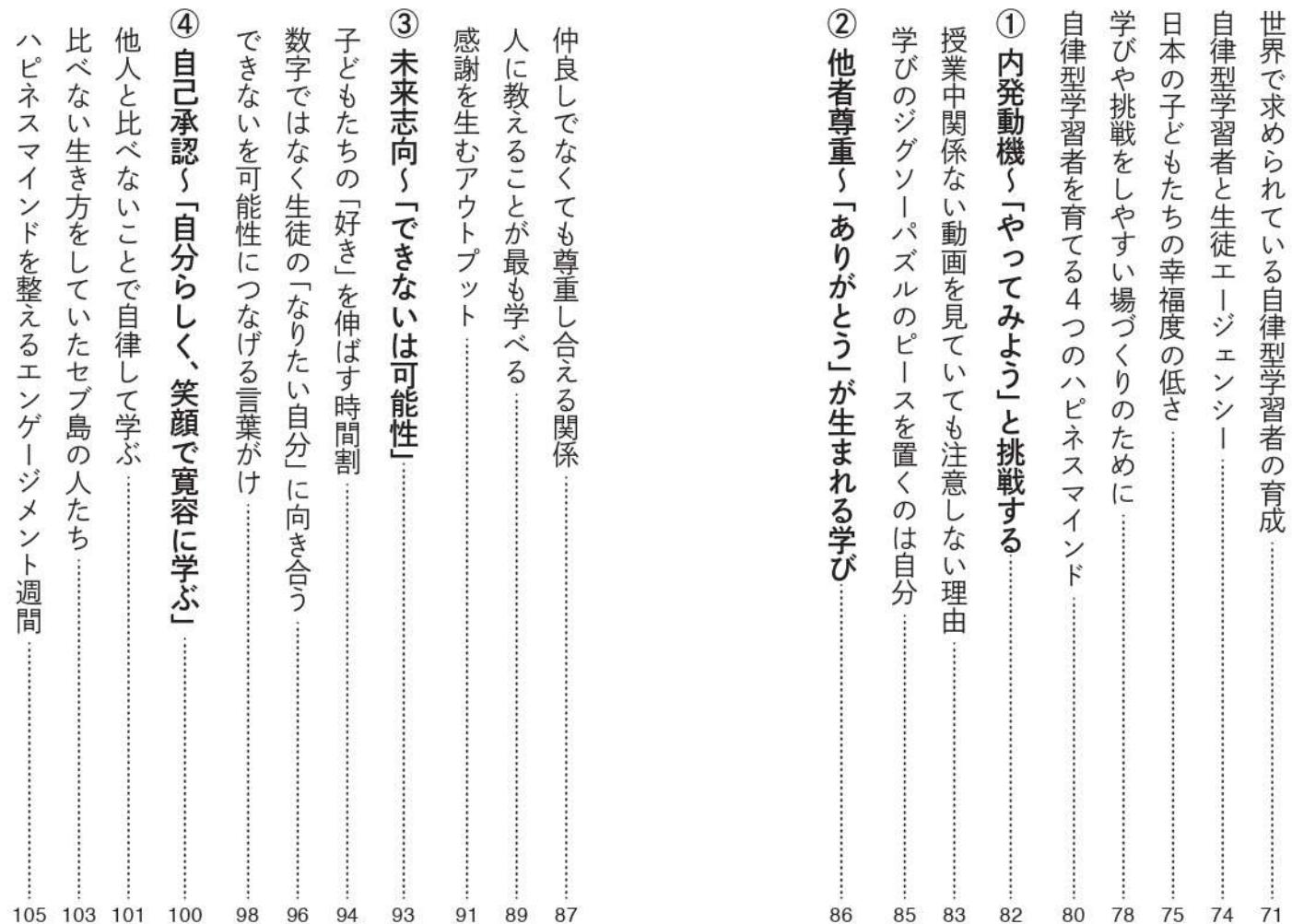
37

34

33

9

第②章 自分からどんどん学ぶ子の資質・能力とは?



第3章 子どもたちに身につけてほしい資質・能力を育む関わり方

- 自分から学ぶ子はどんな資質・能力を持つ子なのか?
自律型学習者のりつの「コンピテンシー」
あなたはどんな言葉で子どもたちを呼みますか
自分をコントロールする力(Self-Control)を育てる
他者とのつながる力(Communication)を育てる
新しい価値を創造する力(Creation)を育てる
アウトプット型テストの具体例(国語・数学)
アウトプット型テストの具体例(英語)
アウトプット型テストの具体例(社会)

第4章 これからの中の教師の役割とは?——教師の羅針盤

- よじ〇〇とは
自律型学習者を育てる教師の役割
「先生のおかげ」から「自分でわかった」へ
教師の羅針盤
個人的な視点から世界的視点へ
知識を得る学びからチャレンジする学びへ

アウトプット型テストの具体例(理科)
147

164 162 160 158 156 155

第
5
章

どんな子どもも自律できる



自律を育てるのは、ガーデニングのようなもの
子どもが安心して自律できる場をつくる
学校における自由とは
リアルな社会のコンピテンシーの事例
なぜ「自律」が大切かをわかりやすく伝える
おわりに

187 180 177 175 173 171

第1章

「学びのミライ地図」を
描き出した子どもたち

子どもたちに「やりたいことは何？」と聞いたら何と答えるでしょう。

通用しなかつたアクティブ・ラーニング

僕が、新渡戸文化学園に赴任した2019年。この年に入学してきた中学1年生の英語を受け持つことになりました。この子たちとの最初の授業はいまでも忘れられません。僕は、これまでの25年の教師経験の中で、生徒たちが主体的に学ぶアクティブ・ラーニングの手法を用いた授業に、ある程度手ごたえを感じていました。

たとえば、初めて持つ中学1年生には、英語の絵本やゲーム、チャンツなどを通じて「英語だけで授業を受けられた」「英語は人生を豊かにしてくれる」「自分でも英語ができるようになりそうだ」といった達成感を感じられる授業を行い、実際に子どもたちがぐんぐん自信をつけていく様子を目撃することができました。たとえ校内暴力などの問題も多く、学ぶ意欲の低い指導困難校と呼ばれる公立中学校であっても、学力の高い中高一貫校であっても、この授業デザインで全員が笑顔になる経験を何度もしてきました。

しかしながら、この手法がこのときまったく通じなかつたのです。

私立の学校ですから、生徒一人ひとりがどのように学んできたかの背景は公立以上にさまざまです。中には、受験に失敗し、自己肯定感が下がっている子もいたと思します。小学校時代に勉強に自信を失って、興味がなくなってしまった子もいたでしょう。

そこに一方的にさまざまな手法をぶつけてしまったのです。当然、そこには拒否反応も生まれました。

「そもそもなぜ英語を学ばなければならぬのですか」

子どもたちの表情はそう語っているようでした。

このことは、僕に大切なことを思い出させてくれました。これまで僕が教えていた子どもたちは、「中学校では英語は学ぶもの」というマインドセットができる子が多く、英語の授業を受けることに何も抵抗はありませんでした。もちろん、英語を学ぶことに否定的な子もいたでしょう。しかし、周りに合わせていく「従順さ」は、集団として英語を学ぶ方向に導くには十分でした。

この従順さを知らず知らずのうちに当たり前だと思って、授業をしていたのです。

この従順さは時に教師の思考を停止させます。言うまでもなく、授業の主役は生徒

たちです。生徒たちが何をどのように学びたいかが、生徒主体の授業では一番大切だと頭ではわかっていました。しかし、これまでの生徒たちの従順さに慣れてしまい、アクティブ・ラーニングの授業をしていましたいえ、生徒が自律して学ぶという点ではまだまだ不十分だったのです。

「学びのミライ地図」が描けない子どもたち

自信を持っていたアクティブ・ラーニングの授業が通用しなかった僕は、原点に戻り、英語を学ぶ目的を子どもたちと合意したいと考えました。

もちろん、これまでも、学びの目的は授業で扱ってきました。目的のない学びからは自律した学びは生まれません。しかし、子どもたちにもっとわかりやすい形で目的を意識する方法が必要だと感じました。

そこで、考えたのが「学びのミライ地図」です。「学びのミライ地図」は、いまの自分を起點として、「なりたい自分」（未来）に伸びる矢印の周りに自分の「やりたいこと」「挑戦したいこと」を書いていくものです。